真ん中：田中数之助氏　右：宇喜多秀穂氏

日本無軌道電車の本社前

田中数之助の夢

日本無軌道電車は当初は大いに期待されました。特に、当時、我が国のようにガソリンに恵まれない、水力豊富な国には電気で動く無軌道電車は非常に有利であったと言えます。また、住宅地内のコミニティーバスとしてトロリーバスを走らせる。これは現在でも通用する素晴らしい発想で先見の目があったと言えます。いずれは、能勢電の多田停留所まで伸ばす壮大な計画を持っていました。これが実現しますと 50 万坪の住宅地内を無軌道電車が走ることになり、教育設備も備えた関西唯一の田園都市となる壮大なニュータウン計画でした。小林一三氏も「おおおお」と唸ったのも理解できます。

当時の昭和 4 年 (1929 年)1 月の大阪毎日新聞に「いのししの通う道に、日本最初の無軌道電車を開発して、ここに十年の思い出」というタイトルで新花屋敷開発の思い出を田中数之助氏は次のように語っています。

「新花屋敷の地を初めて踏んだのは大正 8 年 (1919 年) だった。当時、そこには道らしき道は無く、満願寺の前のお百姓さんが町に買い物に下りるための小路があったきりで、笹や芝で覆われキツネやタヌキの通る道としか思えなかった。寺を中心に和尚と門前に農家が三軒、合わせて 12、3 人が住んでいた。その付近には最明寺の滝があり、この地は水量水質に富み南に向かう素敵な住宅地であると発見し住職から 60 万坪を譲り受け、藪や林を切り開き、田や沼地を埋め立てて道路を造り住宅地として開発した。指折り数えて 10 年が経ち、温泉場や遊園地も完成し、赤や青の屋根の別荘や住宅が 70 戸建ち、今では 350 人が住むようになった。開発十年にして思うと感慨深いものがある。今はいのししの通った道に無軌道電車が走っている」

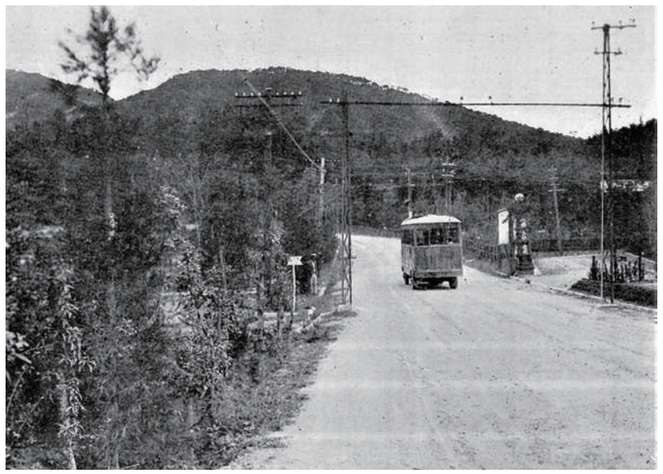
呉服屋から裸一貫で身を起して土地開発、鉄道事業まで、田中数之助氏にとってこの壮大な夢の実現は、まさに彼の人生の絶頂期だったようです。

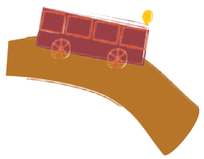
企業家の栄光と挫折

開業して一年間、無軌道電車の運行は安定しましたが、最初は珍しさで増加した乗客も、その後の不景気により客足も途絶えがちになりました。ようやく日本無軌道電車の開業にこぎつけたものの、設備費用に約３０万円を投入したため手元資金は底をつき、増資と土地売却での資金繰りが続きました。これは土地の値上がりを見越した、まさにバブルの経営であったと言えます。さらに、昭和４年（1929年）の世界金融恐慌が襲います。その影響で国内経済は急激に悪化します。本業の土地分譲が景気の悪化で売れず、社外負債も約17万円を抱え、赤字は雪だるま式に増えて行きました。

田中社長は開業翌年10月の重役会で経営責任を強く追及されたようです。それ以来、出社は途切れがちになり、昭和４年11月21日会社にちょっと顔を見せたきりで、その後、行方が分からなくなりました。家族はもとより決算期を控えた会社関係者は狼狽して八方手を尽くして探したのですが消息はつかめませんでした。田中社長は慣れない鉄道事業だけに経営が思うように行かず金策に走り回る日々だったようです。

田中社長が行方不明になった後も無軌道電車の営業は続けられましたが、赤字続きで、昭和7年（1932年）1月から運休となり、ついに、同年４月に日本無軌道電車の営業は３年余りで廃止されました。





おわりに

現在、新花屋敷温泉跡は住宅が立ち並び、花屋敷の坂道も無軌道電車に代って阪急バスが走っています。もう開業当時の面影はほとんど見られませんが、つつじガ丘付近の急勾配の坂だけが延々と続き、道沿いの万年坂のお地蔵さんが何事もなかったかのように静かに時の流れを見届けています。21 世紀になり 20 年経過しました。私も、2001 年にトロリーバスが街を変える (副題として都市交通システム革命) と言う本を執筆しましたが、マイカーから公共交通への移行が一向に進みません。これが今の現実なのです。

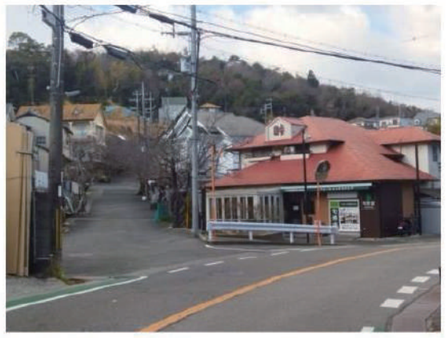
今、日本は、誰もが事なかれ主義に陥り、現状維持に努め、経営者も政治家もチャレンジ意欲が見られません。鉄道の創業期には数々の栄光と挫折がありました。今こそ、事業にロマンと夢をかけた資本家　田中数之助氏、ユニークな集客手法を編み出した支配人　宇喜多秀穂氏、日本初の純国産無軌道電車を設計した　技師　黒田豊氏　このような人物の登場が望まれます。

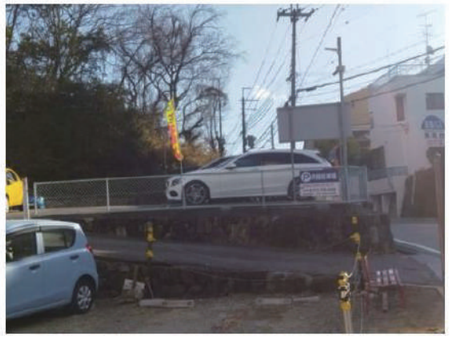
３年間という短い間でしたが、日本で初めてのトロリーバスがこの地で走っていたんだということを、地域のみなさまは誇りに持っていただき、後世にお伝えいただければと思います。

長尾台本社前の今昔

日本初のトロリーバスが走っていた
昭和3年（1928年）ごろ

令和4年（2022年）2月

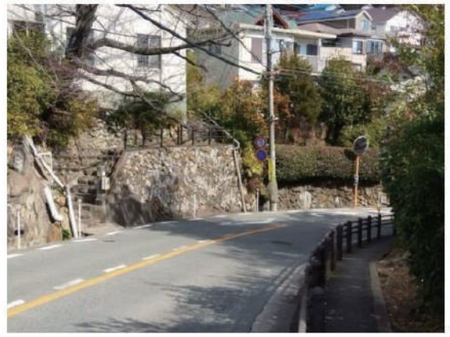


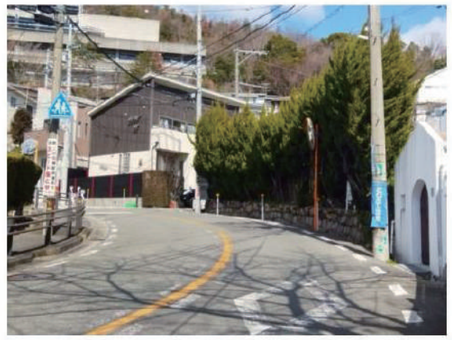


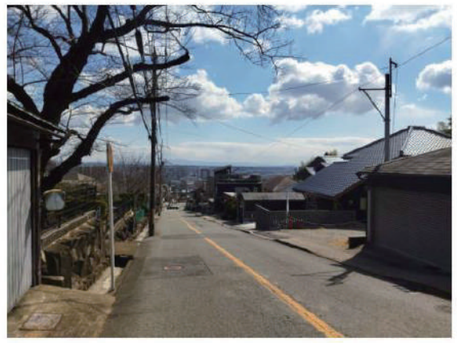
花屋敷つつじガ丘バス通りの今昔

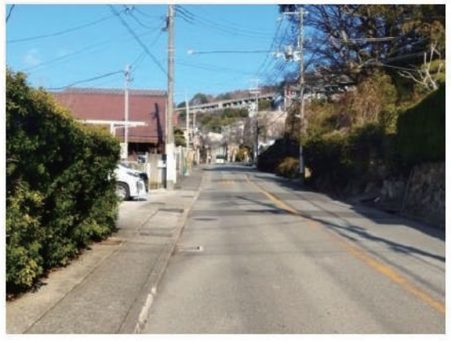
日本初のトロリーバスが走っていた
昭和3年（1928年）ごろ

令和4年（2022年）2月









講演者のご紹介

直宮　憲一（なおみや　けんいち）　　郷土史研究家

1948 年 石川県生まれ
1974 年 3 月関西大学大学院文学研究科修士課程修了
和歌山県岩橋千塚や奈良県に飯沢千塚などの調査を行う。
大学院在学中、奈良県明日香の高松塚壁画古墳の調査に従事する。
1974 年 4 月宝塚市教育委員会奉職後、一貫して文化財行政に携わる。
1995 年より関西大学文学部非常勤講師を勤める。
2009 年 3 月退職後、４月より再任用
この間、「宝塚市史」の作成、各種埋蔵文化財の発掘調査のほか、国指定史跡・中山荘園古墳の調査や保存整備、市立小浜宿資料館、旧東家住宅、旧和田家住宅等の復元保存、国指定重要文化財・中筋八幡神社の修理保存、阪神淡路大震災により被災した文化財の修理保存事業などに携わる。

各種報告書執筆の他、主要論文に「風水思想と古墳の立地」「八角墳再考」「中山寺白鳥塚古墳について」「歴史的建造物の保存と活用」など。
著書に「宝塚の文化財」「宝塚の古墳」などがある。

岡野　慶隆（おかの　よしたか）　　郷土史研究家

1952 年 兵庫県生まれ
関西学院大学大学院文学研究科修士課程修了
川西市教育委員会文化財担当として加茂遺跡・栄根遺跡・満願寺等の発掘調査を行う。
退職後、川西市高齢者大学りんどう学園、市内公民館郷土史講座等の講師を務める。

主要著書等
「長尾山丘陵における横穴式石室ーその企画法と構築技法ー」『市史研究紀要たからづか』第 6 号 1989 年
「『喪葬令』三位以上・別祖氏上墓の再検討」『古代文化』51–12 号 1999 年
『日本の遺跡 8　加茂遺跡』同成社 2006 年

森　五宏（もり　いつひろ）　　NPO 法人 KOALA 理事長

1944 年 京都府宇治市生まれ
1963 年 府立城南高校卒 関西電力株式会社入社
1990 年 本店総務室黒部事業副長
1995 年 千里ライフサイエンス振興財団出向
1997 年 関電産業トラベルサービスセンター所長
2003 年 株式会社モチベート代表取締役
2007 年 NPO 法人 KOALA(都市創生交通ネットワーク @ 関西) 理事長

主な著書「トロリーバスが街を変える」2001 年 RIC 出版
「熱き男たちの鉄道物語」2012 年ブレーンセンター
1928年日本初の無軌道電車が雲雀ケ丘花屋敷の地を走りました。この、鉄道の黎明期に、日本最初のトロリーバス運行に駆けた三人の男たちの熱意とロマンを辿ります。

編集後記

5 年前にこの地域に住み始めて驚いたのはこの地域では自分たちの歴史をまとめ残そうといくつかの記念誌 / 冊子が発行されていたことです。今住んでいる場所の歴史が良くわかりまちづくりの思いが伝わってきます。私たちもいつか同じように資料として残していきたいと思っていました。今年度にコロナ禍にもできるイベントとして歴史講演会・スタンプラリーを企画し進めていく中、せっかくの貴重な講演会の内容を多くの方に知っていただきたいとの思いが沸き起こりました。幸運にも宝塚市からきずなづくり推進事業として助成を頂けたことで一気に進みました。

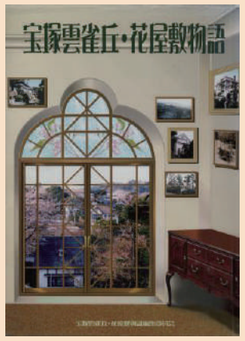
短時間にもかかわらずにご協力いただいた先生方 やスタッフの皆さんに感謝いたします。編集にあたり地域の力を集結して素敵な記念誌が出来上がったと自負しています。これらの活動で更に自分たちの住むまち愛着を深めることができ、まさに協働のまちづくり活動の実践だと感じ ます。

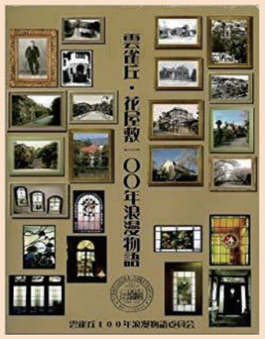
歴史講演会の動画は下記の
QRコードからご覧になれます

歴史講演会動画URL　https://youtu.be/E2ZW3w2IOlQ

コミュニティひばり内での冊子発行履歴

2000 年 11 月 3 日 宝塚雲雀丘・花屋敷物語 (在庫無し) 非売品
　編集・発行 ／宝塚雲雀丘・花屋敷物語編集員会
2006 年 4 月長尾台小学校区の昔物語 (残り僅か) 非売品
　編集・発行／ コミュニティひばり文化・交流部
2016 年 10 月 8 日 雲雀丘･花屋敷浪漫物語 (宝塚市内書店､Amazon で販売中)
　編集・発行／ コミュニティひばり特別委員会 雲雀丘 100 年浪漫委員会
2022 年 3 月 21 日 景観を織りなすわがまちの歴史 非売品
　編集・発行／ コミュニティひばり イベント実行委員会





わたしたちの住(す)んでいるまちについて考(かんが)えてみよう！

❶ このまちの好(す)きなところを書(か)こう！

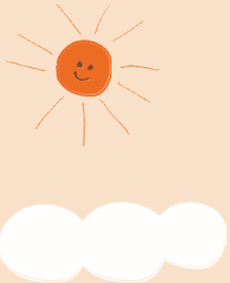
❷ このまちがもっとこうなったらいいな、
と思(おも)うことがあれば書(か)いてみよう！

発行日：令和4年3月21日

長尾台小学校区まちづくり協議会

イベント実行委員会

実行委員長：	松山潤一
副委員長：	山本慶一
講演会チーム：	前田幸夫 (司会兼責任者)
	藤墳里美
	三島基道
	鈴木邦光
	高畑邦彦 (アドバイザー)
スタンプラリーチーム：	宮本加奈美
	藤本加奈子
	田中哲史
	名嘉眞朝敏
	松原孝彦
広報、会場運営：	神村由希子
ポスター、記念誌デザイン：	宇野木の実
事務局：	長榮浩一



本記念誌は令和3年度宝塚市きずなづくり推進事業として補助金により制作しました